ミルトンの楽園と自然環境論

辻　　裕　子

自然環境問題は人類の運命に関わる深刻な問題として産業、経済、政治、科学など現代さまざまな分野で取り上げられてきているが、この問題は現代社会に生きる一人一人が責任を負うべき問題として考えるとき、環境倫理という新しい思想的根拠が必要となってくる。文学研究においてもこの問題に寄与しうる思想的基盤を見出すことができないものであろうか。

ミルトン研究においても近年 Dian Kelsey McColley や Karen L.Edwards や Matthew Jordan らによって、エコロジーの観点からミルトンの自然観を再検討し、エコクリティシズムが試みられている。本稿はこれらの研究を踏まえながら、ミルトンが如何に現代の自然環境倫理に寄与しうる思想的基盤を提示しているかを考察したい。

17世紀の英国は自然科学が発達し、科学技術の刷新の著しい時代であった。航海術の発達に伴って新しい航路の発見や新大陸の発見、植民地への支配力の進展などを見た時代である。ことに植民地ではおびただしい野生の地を開拓し、自然を人間の利益に供するよう利用することが正しいという信念が広がっていった。人々は、創世記の第１章28節で神が人間に対して被造物を「すべて支配せよ」と命じた言葉のみを抽出して彼らの考え方を正当化した。近代科学思想を推進したベーコン（Francis Bacon）はそのような考えの一人であって、「自然を科学技術によって引き出される商品の貯蔵庫」とさえ考え（McColley 157)、植民地の尽きない自然の豊かさに眼を留めるとともに、それを制御する必要性をますます強調するようになった。また、教育改革者の Samuel Hartlib を始めとする Robert Hooke や John Ray らのサークルや Royal Society などが結成され、自然を人間の目的のために改良することが

17世紀の科学の目的であるといった思想がその時代を先導した。

しかし創世記にはもう一つの神の命令があることを彼らは無視していたと思われる。それは「エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」(2.15) という言葉と「産めよ増えよ、地に満ちて地を従わせよ」(1.28) である。ミルトンの *Paradise Lost* はこの言葉の意味するところを、創造された自然そのままの楽園に住むアダムとイヴの生の営みを通して、壮大なスケールの叙事詩で描き出したと言えるであろう。そのような視点から主として *Paradise Lost* を通して、その時代の趨勢とは相容れないミルトンの自然観―人間と自然の関係―を考察したい。

1

ミルトンの自然観のもっとも著しい特徴と思われるのは生命力説の強調である。これはベーコンらの自然を人間の道具と見なそうとする道具主義に対立する思想である。*Paradise Lost* 第7巻で描写される神の天地創造の業は、万物に生命の力と生気を注ぎ込むことから始まる。

> Darkness profound
> Covered th'abyss; but on the wat'ry calm
> His brooding wings the Spirit of God outspread,
> And vital virtue infused, and vital warmth
> Throughout the fluid mass, . . . (7.233-37)

神の霊の業は鳩が翼を広げて生命を孕む生殖のイメージに擬えられる。詩人が神に霊感を求めて祈る invocation のなかでも、神の創造の力を「母鳩のごとく翼を広げて混沌を孕ませた」(1.19-22) と生殖のイメージを用いて呼びかけている。また、「水の中に大空あれ。水と水をわけよ」という第二日目の神の声に、大空の上と大空の下に水を分けられ天が造られた、という記事のあとに、ミルトンは地球を「未熟な胎児」という生殖のイメージとして言及している。すなわち、地球の表面を覆っている海は生成力をもつ暖かい液体であり、偉大な母なる地球を孕ませようとしているというイメージである

(7.276-82)。これらの例からもミルトンは神の創造の業が生命を孕む業であることを如何に強く意識していたかが明らかである。

「光あれ」という言葉からはじまる神の声に即座に応答して、次々と現れ起こる万物は、基本的には聖書の記事に沿っているとはいえ、はるかにダイナミックで生命の躍動感に満ち満ちている。光は混沌のなかから踊り出て暗い大気を横切って旅を始める。「乾ける土をして出現せしめよ」と言う声に、たちまち山々が盛り上がる。

> Immediately the mountains huge appear
> Emergent, and their broad bare backs upheave
> Into the clouds; their tops ascend the sky.
> So high as heaved the tumid hills, so low
> Down sunk a hollow bottom broad and deep,
> Capacious bed of waters. (7.285-90)

土が盛り上がって高いところと低いところができていくさまが如実に描かれ、動的な生命のエネルギーを感じさせる。

自然を人間が用いる道具として考える道具主義者たちは、人間のみが魂を持っていると考える。これと対立する生命力論者たちは、自然はあらゆる部分で生きていると信じていて、物と霊を切り離して考えることをしない(McColly 162)。ミルトンは明らかに後者に属し、万物は神によって命を注ぎ込まれて創造されるや、独立して自活する力をもつようになると信じている。それ故このような躍動感あふれる描写は単なる詩的擬人法ではない。本当に生きていると信じる万物の創造を、叙事詩という形式によって描き出したと考えられる。

現代の環境倫理思想の提唱者であるヘンリック・スコリモフスキーは、『エコフィロソフィ—21世紀文明哲学の創造』のなかで、21世紀に向かって環境倫理の基礎となる新しい哲学が必要であると主張する。そしてエココスモロジーの出発点としてシュヴァイツアーと同様、「生命への畏敬」ということを第一に挙げて、「生命への畏敬は、生命そのものの奇跡と美しさに対

する自然な承認として現れる。ひとたび私たちが全宇宙を畏敬の念をもって眺めれば、私たちは生命という現象を、畏敬を持って抱擁せざるをえない」と述べている (34)。ここに現代のコスモロジーがミルトンのそれと実に共通することに気付くのである。

Paradise Lost におけるコスモロジーの論拠となっているのは『キリスト教教義論』である。このなかでミルトンは、すべてのものは神から現出すると主張している。これは伝統的な神学理論、無からの創造とか、神と関係なく存在する質料 (matter) からの創造という説と対立する一元論である (*Christian Doctrine* 1.7 *Complete Prose Works of John Milton* Vol.6. 307)。すなわち、ミルトンは「質料からの創造」を主張しているが、この質料は「潔らかなものとして神から生じたものである」と言い、万物の本質も神から出たものであるというのである。その論拠として、ローマの信徒への手紙11章36節「すべてのものは、神から出て神によって保たれ、神に向かっているのです」、コリントの信徒への手紙8章6節「父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちは、この神へ帰って行くのです」、ヘブライ人への手紙2章11節「人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです」などを挙げている。さらにミルトンは4原因[1]に言及して、"Since God is the first, absolute and sole cause of all things, he unquestionably contains and comprehends within himself all these causes." (307) と述べ、神は4原因すべてを包括していることを主張する。すなわちこれは一元論唯物主義であって二元論と対立する考え方である。*Paradise Lost* では、ラファエルがアダムとイヴにこのことを説明して次のように言っている。

"O Adam, one Almighty is, from whom
All things proceed, and up to him return,
If not depraved from good, created all
Such to perfection, one first matter all,
Endued with various forms, various degrees

Of substance, and in things that live, of life;
But more refined, more spirituous, and pure,
As nearer to him placed or nearer tending,
Each in their several active spheres assigned,
Till body up to spirit work, in bounds
Proportioned to each kind. (5.469-79)

「万物は神から生じ、また善より逸脱しない限り再び神へもどってゆく」という考え方は、上述の『キリスト教教義論』のなかで述べていることと一致する。そしてこのことから明らかなことは肉と霊、人間と他の被造物は全く異質のものではなく、同質であり連続性があることである。

この引用の後半の思考のパターンには、明らかに中世以来の存在の鎖（the Great Chain of Being）という概念がその根底にあることに誰しも気付くことである。すなわちこの世のあらゆる被造物は天使・人間・動物・植物・鉱物というように理性・感覚・成長機能などの程度に応じてこの階梯の特定の位置に定められ、それは固定的なもので永久にその位置に留まるものであった。しかしこの引用に現れたミルトンの考え方では、「神の近くに位置を占めれば占めるほど、或いは神の近くへ志向すればするほど、……肉は霊へと上昇しようとつとめる」という言葉で明らかなように、この階梯は固定的ではなく、流動的であり、ダイナミックなハイアラキーである。それはすべての被造物に同質性があり、連続性があるというミルトンの神学が根底にあることを明らかにしている。この存在の階梯の連続性についてさらに、次のように天使ラファエルの言葉が続く。

So from the root
Springs lighter the green stalk, from thence the leaves
More airy, last the bright consummate flow'r
Spirits odorous breathes: flow'rs and their fruit,
Man's nourishment, by gradual scale sublimed,
To vital spirits aspire, to animal,
To intellectual: give both life and sense,

Fancy and understanding, whence the soul
Reason receives, and reason is her being,
Discursive or intuitive; (5.479-88)

ここで植物と人間の連続性を具体的に示している。すなわち、樹木の根から茎へ、茎から葉へ、そして花へ、果実へ、そして人間の栄養物となり、人間に生命力と感覚をあたえ、人間の魂と繋がる。さらに人間が神に従順であればという条件付きではあるが、人間の肉体は浄化されてやがて霊となり、翼をつけて天使となる可能性を述べている。これは植物と人間の連続性とともに、中世の固定的な階梯の観念を超えたルネッサンス的な階梯のダイナミズムをよく表している。ラファエルが語る天地創造の物語のなかでも、天使の群れを前にして、神に従順であるよう諭すために次のように言う。

...till by degrees of merit raised
They open to themselves at length the way
Up hither, under long obedience tried,
And earth be changed to heav'n, and heav'n to earth,
One kingdom, joy and union without end. (7.157-61)

神に対して従順であれば、色々な段階の功績を積むことによって、だんだんこの階梯を昇っていけるとここでも繰り返し述べている。「地は天となり、天は地となる」という言葉は、前述と同様人間と天使、肉と霊の連続性を示唆していると言えよう。また12巻でも天使ミカエルは人間の堕落以後も、信仰あるものにとっては、地にあろうと天にあろうと「この地上はすべてパラダイスとなり、このエデンよりさらに幸福な場所となる」と言っている (12.462-64)。「地は天になる」というミルトンの主張の意味するところは、地上にあるすべての被造物も人間とともに救いの栄光に与るということである。

このように存在の階梯を、人間を含む自然のあらゆるものが、下から上へ、より少ない善からより多い善へとダイナミックに動き、頂点である神へ近づこうとしていると言うのである。Matthew Jordan は、これはルネッサンス特有なキリスト教的ヒューマニズム、ないしはケンブリッジ・プラトニスト

の考え方と一致していることを指摘している。すなわち、彼等は、デカルトやホッブスらによって主張された質料に対する機械主義的哲学や物質の非生命性といった観念に強く反対して、このようなダイナミックな宇宙観を信奉するようになったというのである (119)。

このようにミルトンの生命力説は「万物は神からの現出」という論拠のもとに、万物の同種性ないしは連続性へと発展し、上昇の可能性という論理を生み出す。それが他種や他の人びとへの畏敬の念へと広がっていき、共感とか憐れみの情となる。これは上記に引用した現代環境倫理学者スコリモフスキーの提唱と一致するのである。すなわち、憐れみとはスコリモフスキーの言うごとく「畏敬をともなった理解のこと」である。「それはまた自然に対する畏敬と、私たちが自然の延長であり、そして自然が私たちの延長であるという理解をも含んでいる」(68) と言う同氏の指摘もミルトンの言う万物の連続性と相通ずるのである。

Paradise Lost では堕落以前のアダムとイヴの楽園での生の営みを通して、またそれを取り巻く自然環境の描写を通して、このような世界観をあますことなく提示していると考えられる。

2

堕落以前の楽園では人間と他の動物は、互いに争うことなく楽しげに共存共生している。

> The savory pulp they chew, and in the rind
> Still as they thirsted scoop the brimming stream;
> Nor gentle purpose, nor endearing smiles
> Wanted, nor youthful dalliance, as beseems
> Fair couple linked in happy nuptial league,
> Alone as they. About them frisking played
> All beasts of th' earth, since wild, and of all chase
> In wood or wilderness, forest or den;
> Sporting the lion ramped, and in his paw

Dandled the kid; bears, tigers, ounces, pards,
Gamboled before them; th' unwieldly elephant
To make them mirth used all his might, and wreathed
His lithe proboscis. (4.335-47)

アダムとイヴが楽しげに微笑み交わし、愛の戯れに打ち興じているそばで他の動物たち―ライオンや熊や子羊や豹や象などがいとも楽しげに戯れている様は楽園の重要なイメージである。イザヤ書11章では、未来にメシヤによって回復されるべき楽園で、人間と動物が平和に共存している情景が歌われていているが、この楽園はそのイメージに基づいていると考えられる[2]。ここでは人間も動物も支配と隷属という関係はない。それぞれが独自性を保ちつつ、互いに他者を喜ばせる存在である。そこには多種性の共存共栄のモデルを見出すことができるのである。

このような他者との関係性によって共存する楽園は共感と調和のある一つの世界という観を呈している。それは、すべての自然の被造物に命が満ち満ちていて、すべてが調和しその喜びを万物が共感しているコズモスの世界である。アダムが天使ラファエルに向かって、自分が生を受けたばかりの時、どのように感じたかを語り始める。最初に眼に入ったのは青空であり、山や谷やうっそうたる森、明るい野原や、せせらぎの音を立てている小川であったと言う。傍らにはさまざまな動物がおり、木の枝の上には鳥たちが囀っていて、森羅万象が微笑んでいた（8.260-65）と感想を述べる。彼の周囲に生命の躍動する自然の喜びを共感することによって自己の存在感を感じている。これは人間と自然の本来あるべき関係を示していると言えるであろう。また、アダムとイヴが婚姻の四阿へ向かうとき、全天地は喜びのしるしを見せる。

To the nuptial bow'r
I led her blushing like the morn; all heav'n
And happy constellations on that hour
Shed their selectest influence; the each
Gave sign of gratulation, and each hill;

Joyous the birds; fresh gales and gentle airs
Whispered it to the woods, and from their wings
Flung rose, flung odors from the spicy shrub,
Disporting, till the amorous bird of night
Sung spousal, and bid haste the ev'ning star
On his hill top, to light the bridal lamp. (8.510-20)

このような人間とすべての他の被造物との間にある共感関係は、他種性の共存とともに重要なコズモスの特質である。しかし人間の堕落が起こるやこのコズモスは崩壊することになる。イヴが禁断の木の実を採って食べようとするその決定的瞬間、「大地は傷の痛みを覚え、『自然』もその万象を通じてうめき声を洩らし、悲嘆の徴を示した」(9.782ff.) とある。アダムがイヴに誘われて木の実を食べるときも同様に自然は再び、うめき声をあげる (9.1000-1005)。このような全天地の共感関係は、森羅万象が命に満ちていることの証しである。詩的擬人法という技巧としてこれらを考えるべきではなく、万物が生命をもって生きている世界を叙事詩によって再現していると考えられる。

このような人間と自然の共感関係は、同時に人間と人間の関係の一体感を強めていく。イヴは美しい自然への賛美と悦びを歌いつつ、やがてそれはアダムに対する愛の賛歌へと巧みに変わっていく。

Sweet is the breath of mourn, her rising sweet,
With charm of earliest birds; pleasant the sun
When first on this delightful land he spreads
His orient beams, on herb, tree, fruit, and flow'r,
Glist'ring with dew; fragrant the fertile earth
After soft showers; and sweet the coming on
Of grateful ev'ning mild, then silent night
With this her solemn bird and this fair moon,
And these the gems of heav'n, her starry train:
But neither breath of morn when she ascends
With charm of earliest birds, nor rising sun

On this delightful land, nor herb, fruit flow'r,
Glist'ring with dew, nor fragrance after showers,
Nor grateful ev'ning mild, nor silent night
With this her solemn bird, nor walk by moon
Or glittering starlight without thee is sweet. (4.641-56)

この部分は抒情詩として完璧な技巧が駆使されていて、前半（641-49）は明らかに自然美への賛歌であり、後半（650-56）の愛の賛歌を主意とすれば、前半の自然への賛歌は主意を強調するための媒体へと転じている[3]。その他さまざまな技巧が駆使されているが[4]、堕落以前の楽園では、純粋無垢なままのイヴがそのような技巧を身につけて、アダムに求愛しているとは考えがたい。自然の美しさが人間に与える悦びと感動をイヴは素直に表現し、それが必然的に人間と人間の関係性、すなわち、一体感を強めることをこの賛歌は如実に表していると考えられるのである。

楽園の人間と自然の関係は、決して客観的関係ではない。それは人間を中心とする主観的関係である。人間が喜べば自然も喜ぶ、人間が悲しめば自然も悲しむというこの共感関係は、詩の技巧としての感情移入として見るべきではない。人間が命と魂を持つと同様に自然も命と魂を持つと信じる世界を、単純に字義通りに描いているのである。かつて Isabel Gamble MacCaffrey はこのような楽園の世界をカッシラーやマリノフスキーの神話学の原理を援用して、ミルトンの楽園は神話の原理が生きている世界であり、字義通りの出来事が起こっていると信じる世界であると論じた。その場合にも強調されたようにこの共感関係は主意と媒体の二つの意味が重なっているメタフォーやアナロジーとしてとるべきではなく、単純に字義通りの意味が重要なのである[5]。

さらに注目すべきことは、人間を囲む自然は人間を中心としていて人間にその恵みを差し出し、人間に対して限りなくやさしい。労働のあとの二人にそよ風は一層快い。

...and after no more toil

Of their sweet gard'ning labor than sufficed
To recommend cool Zephyr, and made ease
More easy, wholesome thirst and appetite
More grateful, to their supper fruits they fell,
Nectarine fruits which the compliant boughs
Yielded them, sidelong as they sat recline
On the soft downy bank damasked with flow'rs. (4.327-34)

"compliant boughs" は果実がたわわに実っているイメージと人間の求めに応じて喜んで果実を差し出しているという意味が重なっている。イヴが「月や星はなぜ輝いているのでしょう」とアダムに尋ねるとき、星の光が "kindly heat" でもって地上で成長するものに、その効力を注ぎ込んでいると次のように言う。

Lest total darkness should by night regain
Her old possession, and extinguish life
In nature and all things; which these soft fires
Not only enlighten, but with kindly heat
Of various influence foment and warm,
Temper or nourish, or in part shed down
Their stellar virtue on all kinds that grow
On earth, made hereby apter to receive
Perfection from the sun's more potent ray, ... (4.665-73)

ここでアダムは星や月だけでなく、太陽も地球に自然の影響力をもち、地上に成長する生きとし生けるものに優しい影響力を与えていることを述べている。"kindly" という語は、「自然な」という意味と「優しい」という意味と両方の意味を生かして用いた pun であることは明らかである。ルネッサンス時代の占星学では吉凶いずれにしろ何らかの影響力を地上に対してもつとされていたが、堕落以前にはよい作用だけを及ぼしていた（平井正穂 上 306）ことを意味している。同様にラファエルのスピーチを通して、太陽の力が地球に対してどれほど威力を発揮しているかを述べ、さらにそれが地球の住人である人間に奉仕していることを指摘している（8.95-99）。大地の美しい世

界が如何に天に似ているかをいみじくも指摘しているのは皮肉なことにサタンであるが、その独白のなかでも、人間を中心にして天の光を投げかけていること強調している。

> "O earth, how like to heav'n, ...
> Terrestrial heav'n, danced round by other heav'ns
> That shine, yet bear their bright officious lamps,
> Light above light, for thee alone, as seems,
> In thee concentring all their precious beams
> Of sacred influence! As God in Heav'n
> Is center, yet extends to all, so thou
> Centring receiv'st from all those orbs; in thee,
> Not in themselves, all their known virtue appears
> Productive in herb, plant, and nobler birth
> Of creatures animate with gradual life
> Of growth, sense, reason, all summed up in man. (9.99-113)

天ではすべてが神中心であるように、地上にあっては一切の中心が地球であり、すべての天体から光を受けていること、その光の力によって植物を生じさせ、生長と感覚と理性という３つの段階を経て生き生きとして躍動する生物を生み出し、その３つの段階をすべて集約しているのが人間であるというのである。つまり天体の一切のものが、人間を中心としてその影響力を及ぼしている。このように一切が人間を中心として捉えられていて、それは現代の科学のように客観的ではなく、主観的自然観である。

現在、われわれが直面している地球環境問題を考えるとき、科学的客観的データを知ることは重要であるが、環境倫理として考えるとき、この主観的自然観こそわれわれが回復しなければならない課題である。この主観性から自然に対する畏怖の念や感謝や、祈りといった現代人が忘れかけた観念が生じるのである。スコリモフスキーは、宇宙は人間精神と深く関わりあって存在するものであり、地球の運命、この宇宙の運命に対して私たちが責任をおうべきであるという主張に基づいて、「関与精神」というものを提唱している。

それは「自分が宇宙と共働的に創造し、参与的宇宙の意味を完成させる参与的意識」(29) である。そして客観性を「精神の虚構である」として排除する (58)。スコリモフスキーのエコフィロソフィーに関するこれらの提唱は楽園のアダムとイヴの生活についてもそのまま当てはまるのである。

この美しい調和と和合のある楽園の自然環境のなかで、アダムとイヴは自ずから創造主に対して賛美と祈りの言葉を捧げている。創造主なる神を称賛するのに必要な形式も、心の底から湧き起こる敬虔な感動も人間には本来備わっていたのである (5.144-52)。また、暁の光がさし始めるとき、大地の朝露にぬれた花や生きとし生けるものすべてが、創造主に向かって沈黙の賛美の声をあげ、快い芳香を放ち始める。

Now whenas sacred light began to dawn
In Eden on the humid flow'rs, that breathed
Their morning incense, when all things that breathe
From th' earth's great altar send up silent praise
To the Creator, and his nostrils fill
With grateful smell, forth came the human pair
And joined their vocal worship to the quire
Of creatures wanting voice. (9.192-99)

大地は祭壇に見立てられ、花々の芳しい香りは祭壇に供えられた献げものである。この声なき花々の賛美の祈りに呼応して、二人の人間による祈りの言葉が唱えられる。この情景は、人間と自然が一体となって神を賛美していると言える。Jordan はこの部分に関して「アダムとイヴの祈るという行為は、花の香りが花の一部であるように、存在の一部である」とコメントしている。そして人間は神による創造物の一部であるが、声に出して賛美できる人間は、他の言葉をもたない被造物のなかでもっとも重要な存在である、その意味で人間は万物の主であると同氏は指摘する (133)。

このような和合と一体感のある楽園において、人間の支配とはどのような意味をもっているのであろうか。創世記 2 章20節にもとづいて、*Paradise*

Lost では神は人間に「全地球を、与える。主（lords）となって、この地球とそこに住むあらゆるものを、支配するがよい」(8.338-41) という命令を下している。ここでいう被造物の主とはどういう意味であろうか。これを人間の都合のよいように支配したり、開発利用することと解釈することから、現代の乱開発を生み出すきっかけとなった。また道具主義的合理主義を正当化する論拠としてしばしばこの言葉は利用された。しかしミルトンはどのように解釈しているであろうか。Jordan は、人間が主であるのは「支配とか開発」というよりむしろ管理人 "custodianship rather than domination and exploitation," (135) としての主であると解釈している。また Svendsen は人類を "another kind of life in degree more Princely" than plants (115) と呼んでいることから、"a more princely order of creation." に属することを指摘している[6]。つまり、被造物の中でも威風堂々とした王者のような地位であるというのである。アダムとイヴが初めて登場するとき、サタンの目を通して描かれた気高い人間は "Two of far nobler shape erect and tall, God-like erect, with native honor clad/ In naked majesty seemed lords of all, ..." (4. 288-90) である。つまり、人間は神の似姿に創られたという意味で、他の被造物と一線を画する王者のごとき存在である。さらに人間は他の被造物に名前を付ける能力を神に付与される。神が「お前から名前をつけてもらい、恭しくお前に忠誠を誓うようにと、わたしは今ここへ鳥や獣を呼びよせるから、見ているがよい」と命ずると、たちまちアダムの前にあらゆる獣たちがあたかも媚びるかのように、ひくく身をかがめてやってくる (8.343-54)。この個所について Jordan は、「人間は他の被造物に対して支配者とか利己的利用 (exploitation) の関係ではなく、思いやりをもち責任を負う管理人としての封建君主とその家臣のような関係である」と指摘している (135)。

楽園で人間に課せられた仕事とは、どんどん繁茂する庭の草木の手入れをすることである。アダムはイヴに楽園での労働の意義を次のように教えている。「神は、労働と休息を交互に人間に課しておられる。」(9.613-14) そして人間には心と体の仕事というものがあって、それが人間の尊厳を示している。

しかし労働は本質的に楽しいものと認識している。額に汗して労働が苦しいものになるのは、人間の堕落の結果なのである。楽園での労働を楽しいものにしているのは、「人間中心の環境自然観によるものである」(the thoroughly anthropocentric nature of their surroundings.) と Jordan は述べ (135)、ここでの労働はほとんど神への賛歌と祈りに近いことを指摘している。すなわち、賛美の祈りに続いて労働が始まっている (5.209-12)。そしてその労働とは、伸び放題にのびた草木に秩序を押し付けるのではなく、自然の生育の過程を管理することである。J. B. Broadbent は「アダムとイヴは自然を開拓するのではなく、文字通り自然を教化する」(Adam and Eve do not exploit nature but literally educate her.) (177) と述べているが、Jordan も指摘する通り、エデンにおける労働の役割は、枝が伸びすぎて絡み合っているのをそっと引き離したり、葡萄の蔦を楡の木にからみつけたりすること (5.213-15) によって、豊かな自然のなかで物を育成することであり、躾をすることである。躾は従属させるための手段というより、むしろ、自然に調和を与える方法である (136) というのである。現在日本で盛んに流行しているガーデニングの原型である。

しかし楽園の自然は 2 人の労働では手におえないほど豊饒である。2人が刈っても刈っても草木は繁茂し、人間の感覚の享受しうるあらゆる悦楽を満喫させんばかりに、自然のすべての豊潤な世界が繰り広げられている (4.205-206)。この自然の豊饒さの前でサタンも驚嘆を禁じえないほどである。自然の豊饒さを、過剰なレトリックを用いて強調するのは、ミルトンの初期の作品仮面劇 *A Mask* (*Comus*) のなかでコウマスがレディを誘惑するときの台詞である。悪魔コウマスは、詭弁を弄する手段として、自然の豊かさは人間を喜ばせ賞味させるためであると説く (*Comus* 710-36)。これに対してレディは、自然は「良い賄い人」であり、「何の罪もない自然」の正当性を強調する。すなわち、自然の恵みは善良な人だけのためのものであり、程よい節制という神聖な教えに従って生活する人のためにのみ与えられるものである (764-76) という主張である。この文脈では、コウマスの官能主義、刹

那主義に対する反論として、節制の美徳、さらには貞節の美徳を意味しているのであろうが、同時にミルトンの自然環境に対する重要な発言として現在のわれわれに響いてくるのである(私市 25)。今まで無尽蔵と思われていた自然の豊かさという幻想は崩れて、地球規模での自然環境の保全が叫ばれる今日、「正しく理にかなった節度ある管理」というレディの主張は、ミルトンが時代を先取りして、われわれに訴えているようにさえ思われるのである。この点に関して McColley は、"Although temperance in the use of nature's bounty has long literary history, Milton's 'Lady' is perhaps the first advocate of justice to human beings founded on justice towards 'innocent Nature.' (*Comus* 761) (164) " と述べている。

楽園のアダムとイヴはまさに、この「正しく理にかなった節度ある管理」という仕事をする「万物の主」である。彼等はこの果実のなる大地を与えられ、おびただしく繁茂する草木を刈ったり、その育成の手助けをしたりする庭仕事をしている。それは豊かな実りをもたらし、彼等は植物を害うことなく果実を摘み取って食べる (5.321-49)。また彼等のそばに生息する動物に干渉されたり干渉したりすることなく動物を観察し、知識と悦びを得る。動物は人間に仕えるというより、彼らなりに楽しげに戯れていて、人間は動物と環境をともにしていることに対していわば管理責任をもっている。これが人間と自然環境との理想的な関係である。

3

しかしアダムとイヴは楽園の草木がどんどん繁茂して、二人だけの手に負えない仕事であると感じている。少しでも制しようとするとかえって人間を嘲るように生い茂る (9.205-14)。人間がそこから追放されるきっかけとなるのは、イヴが提案する分業による労働の効率という人間的な知恵であった。また悪魔に誘惑されるもう一つの大きな要因となったのは、知識を得て神のようになりたいという欲望をそそのかされたことである。

自然環境論の観点から考えると、多くの木の中で一本の木だけが禁制され

ているのは、それによって創り主神への従順を試すことであると同時に、自己抑制という人間の意志を試すためである[7]。そして創り主を敬うこと、神が創造したものを無制限に開発したり、奔放な浪費者とならないように人間に警告するためであると考えられる (McColley 166)。

やがて人間は、神の戒めを破って禁断の木の実を食べ、この楽園は崩壊する。神によって送られてきた天使ミカエルによって、二人は、「ここを出て行かなければならないけれども、あなたの心のなかに内なる楽園— A paradise within thee, happier far (12. 585-87) を持ちなさい」と諭される。これが *Paradise Lost* の結論である。アダムとイヴは天使ミカエルの諭しを聞いて、神の恵みを感謝と喜びをもって受け入れるとともに、来るべき未来に「内なる楽園」を得ることを確信して、二人手に手をとって楽園を出て行き、荒涼としたこの世界へと旅立つのである。

ところで、「内なる楽園」とはどういう意味であろうか。このコンテキストから言えばよき業を伴う信仰をもつこと、そこからくる内的な悦びということであろうが、「内なる楽園」というメタフォーの意味を考えるとき、楽園という文字通りの意味が重要である。楽園においては、今まで述べてきたように、人間を取り囲む自然は生命力に満ち満ちており、人間を中心として生きとし生けるものが、豊な美しい自然の悦びをともにしている。すなわち楽園とは人間が喜べば自然もともに喜ぶという共感関係のある世界、動物と人間が楽しく共存する世界、そして管理責任を負う万物の主たる人間の支配する世界である。そのような楽園は崩壊して、われわれ現代人はいわば荒野に住んでいる。

産業社会が発展するにつれて、自然は荒廃し、産業廃棄物による汚染、公害問題、ごみ問題、不法投棄、オゾン層の破壊、地球温暖化、というように環境問題はわれわれがかつて予想もしなかったほどに、深刻でグローバルな問題へと発展している。このような現代のわれわれに、ミルトンのこの言葉「内なる楽園」とは、失楽園で提示した楽園のヴィジョンを持てという訴えのように聞こえてくるのである。そのようなヴィジョンを心にもつことによ

って、もう一度人間と自然の共存関係を、人間が自然と向き合う本来あるべき態度を、取り戻そうとする努力を促すのではないだろうか。公害問題の場合は企業への法的規制によって、かなり防ぐことが出来たが、環境問題となると法的規制だけでなく、個人個人の自覚と倫理に依存するところが大きい。それだけにそのような倫理道徳は心の問題に帰する。このような健全な心を育成するのが現代社会における文学の役割でもある。本稿で論じたミルトンの自然観は、19世紀のワーズワスをはじめとするロマン派の詩人や、20世紀に現代社会の文明批判をし、生命の神秘性と尊厳を訴えたD.H.ロレンス等の先駆的思想の基盤を提示しているとも見ることができる。また、要所要所で指摘した通り、21世紀に向かって発言する環境倫理哲学者スコリモフスキーの思想とも、一脈通じるところがあることは、優れた古典が現代に生きていることを改めて感じさせられるのである。

注

本稿は同志社女子大学夏期公開講座（2002：07：31）において、2時間に及ぶ講演「ミルトンと自然環境論」の内容に基づいて大幅に改稿したものである。

本稿における *Paradise Lost* の引用は、Douglas Bush, ed., *Milton: Poetical Works* に拠る。また、『キリスト教教議論』の引用は *Complete Prose Works of John Milton*, Vol.6 に拠る。

1．アリストテレスの四原因のことで、質料因、動力因、形相因、目的因である。例えば、家の質料因は木であり、形相因は建築家の設計であり、動力因は契約者であり、目的因は居住ということである。

2．McColley はこのイメージが黙示録5.13に基づいていることを指摘している。また、Roland Mushat Frye によって蒐集された17世紀以前の楽園のアダムとイヴに関する絵図では、ほとんどが動物と人間が共生している様子を描き出している。その代表的なものは、フィレンツエの Medici Academia にあるタペストリーである。このことからもルネッサンスでは、人間と動物が共生しているのが楽園の共通したイコノグラフィであり、それが理想の状態であったことを示している。これと対象的に、19世紀の John Martin の *Paradise Lost* の挿絵では、風景の中にアダムとイヴだけがいる。動物はいない。

3．主意（tenor）と媒体（vehicle）は I. A. Richards が最初に用いた用語で、メタフォーの意味する隠れた意味と文字通りの意味の二つの意味を区別する名称。

4．Fowler はこの部分は "A rhetorically magnificent passage" (650) であると言い、円環とか周期性の文彩である epanalepsis (1.641), epanodos, meisumus, irmus などを指摘している。MacCaffrey は *PL* 12. 617 ("thou to me/ Art all things under heaven, all places

thou") と対比している (77)。

5．Bronislaw Malinowski は、原始社会に存在する神話は、虚構の物語ではなくて、生きた現実 (living reality) であると言う。原始社会においてかって実際に起こったと信じられるリアリティであり、それは世界と人間の運命に影響を与えつづけるものである (21)。Ernst Cassirer は同様に神話の対象とするものがリアリティであることを強調している (75)。MacCaffrey はこれらの神話学の原理を *Paradise Lost* の構造のなかに見出して、ミルトンの楽園は、字義通りの意味が生きている世界であって、その詩的言語を感情移入や比喩として読むべきではないと論じる。拙論 "Myth and Language in Milton's *Paradise Lost*" 同志社女子大学「学術研究年報」15 (1964) : 13-33。

6．Svendsen は Gerhardus Mercater の *Historia Mundi* から引用して、宇宙はより卑しいものからより高貴な種へ進み、さらに最高の種へ近づくと言う。したがって植物は石よりも主たる被造物人間により近いと言い、そのような意味で人間を "Princely" と言っている。ここにも万物の同種性、連続性をミルトンと同様に示唆していることがわかる。

7．この禁制を破る行為の意味は、いわゆる原罪ということである。キリスト教教議論では、この行為は神への不信、不従順、恩知らず、神性を望む野心、傲慢、横柄さなどの罪を含むことを記している (*C. D.* 1, 11. Bush の注(390)参照)。拙著 *Rhetoric and Truth in Milton* ではアリストテレスのギリシャ悲劇の理論を適用して、*hamartia* とみなし、その意味を情欲 (passion) の過剰と結論している (190)。この意味で、禁制の意味を「欲望追求の制限」とみる McColley の指摘は正しいと思う。

Works Cited

Bacon, Francis. *The Advancement of Learning.* Ed. G. W. Kitchin. London; Dent, 1965. (Everyman's Library)

The Bible. 聖書　新共同訳　日本聖書協会、1991.

Broadbent, J. B., *Some Graver Subject: An Essay on 'Paradise Lost'.* London: Chatto, 1960.

Cassirer, Ernst. *An Essay on Man.* New Haven: Yale UP, 1944.

Edwards, Karen L. *Milton and the Natural World: Science and Poetry in Paradise Lost.* Cambridge: Cambridge UP, 1999.

Frye, Roland Mushat. *Milton's Imagery and the Visual Arts: Iconographic Tradition in the Epic Poem.* Princeton: Princeton UP, 1978.

Jordan, Matthew. *Milton and Modernity: Politics, Masculinity and Paradise Lost.* New York: Palgrave, 2001.

私市元宏 (編注と訳)『ミルトンの Comus』 山口書店，1980.

Kusakabe (Tsuji's maiden name), Hiroko. "Myth and Language in Milton's *Paradise Lost*" 同志社女子大学 「学術研究年報」15 (1964) : 13-33.

MacCaffrey, Isabel Gamble. *Paradise Lost as "Myth".* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1959.

McColley, Dian Kelsey. "Milton and Ecology." *A Companion to Milton.* Ed. Thomas N. Corns. Oxford: Blackwell, 2001.

Malinowski, Bronislaw. *Myth in Primitive Psychology.* London: Kegan Paul, 1926.

Milton, John. *Milton: Poetical Works.* Ed. Douglas Bush. Oxford: Oxford UP, 1966.

Milton, John. *The Poems of John Milton.* Ed. John Carey and Alastair Fowler. London: Longman, 1968.

———. *Complete Prose Works of John Milton* (ed. Don M. Wolfe, et al.), Vol.6 *Christian Doctrine.* Ed. Maurice Kelley and trans. John Carey. New Haven: Yale UP. 1973.

———. 平井正穂訳『失楽園』東京：岩波書店，1981.

Richards, I. A. *The Philosophy of Rhetoric.* New York: Oxford UP, 1950.

Skolimowski, Henryk. 間瀬啓允・矢嶋直規（訳）『エコフィロソフィ—21世紀文明哲学の創造』（*Living Philosophy: Eco-philosophy as a Tree of Life.* London: Penguin, 1992）京都：法蔵館，1999.

Svendsen, Kester. *Milton and Science.* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1956.

Tsuji, Hiroko. *Rhetoric and Truth in Milton: A Conflict between Classical Rhetoric and Biblical Eloquence.* Kyoto: Yamaguchi Publishing House, 1991.